滿鮮旅行記

○出　帆

昨日東京を出てから二十九時間といふものを走り通しに走つた汽車はいま大勢のお客や荷物をはき出して長いからだを廣い下の關驛の構内に横たへた。人間ならばヤレ〳〵とでも云ふところ御苦勞だつたと一言云ひたい樣な氣がした。櫻蔭會の方々がお揃ひでわざ〳〵迎へに出て下さつた。竹島先生もこゝから一行にお加はりになるので一層賑かになつた。旅の疲れなど思ふ暇はない。何處へ行つても卒業なされた姉樣達が働いていらつしやるのだと私はほんとに心強さを感じた。

今度はきつと夏蜜柑、名物の瓦おせんよ、などゝ勝手なお願ひをしたりあてつこをしたりして沿道の皆樣からの贈り物を樂しんだ關西旅行の記憶はまだ新しい。昨日の午後に東京をたつてからといふものは、澤山のおなつかしいお顏が窓に見えて私達の旅行の前途を祝して下さつた。そして色々の贈り物をして下さつた。今晩もまた大勢の方に迎へて頂いて送つて頂いて何だかお殿樣旅行の樣な氣持がする。私達はまあ優しいお手からお手にうつされて希望にみちたこの三週間をどんなに嬉しいどんなに安らかな旅をつゞける事だらう。

埠頭には大きな船が横づけになつて居る。だんだん近寄つて見ると「さくら丸」と白い字であざやかにかいてある。私達の乘る船はこの船だといふ。一晩あければ明朝はもう高麗百濟の山が見える。朝霧の中に横つて居る陸をみたとき私達の心はどんなに躍ることだらう。

汽車からの荷物を赤帽がかついて來る。船のボーイがうけとつて下へ運ぶ。稅關の御役人は一々に檢査をする。手拭や案内記やノートや森永のミルクキャラメルやらそんなものしか入つてないバスケットを一寸形式的にガシャ〳〵させただけで無事及第、稅關の前を通りぬけて細い急なブリッヂをおりていつた。ペンキのにほひが鼻をつく。三等室の中で男も女も若い人も年寄りも身一つをもてあまして居る。天井といつたら壓しつけられる樣に低い、立てば頭がつかへる。周圍のパイプにはスチームが通つ

て居る。然も風通しはあまり充分でない。じつとして居ても玉の汗がにじみ出る。たとへば蒸し風呂の中につめ込まれた樣だと一人がいふ。一生涯にする暑さといふものを一度にかためてする樣だとまた一人がいふ。息がつまりさう。何乘暑かの苦しみだ。小さい子供はうるさい事をいふ。母親はもてあまして居る。荷物のことは大概にして置いてにげ出す樣に甲板に出た。こゝは全く別天地實に極樂風が吹いて居る。しめつぽい潮風はほつれ毛をなぶつてゆく。活き返つた樣な心地で思ひきり大きな息をした。外海に出るのは初めてだと不安げに海上をみまもつて居るものもある。然し玄海の夜の濤を蹴つてゆくのかと思ふと快い。胸が躍る。黑い海上になげかけられた船の灯は何ともいへぬなつかしい感がする?。もやり船の赤いほかげが波にもまれてすべつて來る。ダブリ〳〵と船べりを洗つて居る波の音は陸をはなれるといふたよりない心をそゝる。出帆も間近く出入も多い船内は、めまぐるしいほど雜踏して居る。門司の港の灯が見える。八幡の鉄工場と思ふあたりはなんだか空まで赤らんで居る樣だ。目のつゞくかぎり九州の沿岸を灯がつゞつて居る。鐘がなる。見送り人はたちのいた。錨はあげられた。大きな汽笛と一緒に船は靜に埠頭をはなれた。送つて下さつた皆樣のお顏もぼんやりになつて、ハンケチも、どなたかゞかざしていらした白扇も見えなくなつた。何だか急に寂しい樣な氣がした。船は大きく舳をまはした。強い光に進路を照して夜目にも著るい眞白な波の泡をはかせて進んでゆく。なつかしい下の關の港の灯もみえなくなつた。空には星が輕い光をなげて居る。實に靜な夜だ。何だか今夜は特別に大きく空が開けて居る樣な氣がする。天も靜か。水も靜か。寂寞な天地の間を、魔のすむ樣な黑い海の上を、船はすべる樣に走つてゆく。もや〳〵とした三等室を思ふと一寸降りる氣はしない。大空をみあげたり。じつと海上をみつめたり。欄干にもたれて微吟して居る人もある。大勢の人がいつたり來たりして居るが、甲板は割に靜だ。外海に出たせいか風は一入涼しく吹いて來た。

○釜山から京城まで

北の國から西の港へ、父の轉任に成つた自分の振

り分髪の頃、それは小い心に可成な刺戟をもたらしたもので有つた。生れ故郷を去らねばならぬと云ふ悲しみと、未だ見ぬ國に移るといふ好奇心とが、縺れ合つて、幼い心、を震はせた物だつた樣で有る、其時一番心を惹かされた物は、「お天氣のよい時遠くに朝鮮半島が見えますそうな」、と誰かの囁いた言葉で有つた、ボンヤリした意識にも、妙にそれ丈はハッキリ殘つて居る、此の頃から朝鮮と云ふ語は自分の心をそゝるなつかしい名と成つた。西の港はよく朝鮮の便をもたらし、又彼の地に渡る人を見る機會が多かつたので、追々自分の心は此の國を憧れるやうに成つて來た。

こう云ふ我と我心の成り行きを獨りぢつと見詰めて、朝鮮の海に船の朝が明けた時、どんなに嬉しかつたであらう。「望は遂に叶ふものだ。」と去年富士山上で感じたと同樣な得意が嬉しう波うつた。朗かな日は輝いて海面には小波さへ立たぬ朝だけれども。濃霧の爲に進み得ぬ事約一時間、我船から亂打される警鐘と島から答へる霧笛とは、交々あしたのしゞまを破る、船客は一樣に甲板上で霧を隔てた港に思を走せて佇んで居る。なか〳〵姿を見せない釜山港は。何となくはにかんで居るやうにも、又勿体振つて居るやうにも思はれてをかしう感じられた。日は段々海の面に鮮かな光を落し、濃い霧の間に迄も喰ひ入るかと思はれた其瞬間、あつといふ間にする〳〵と霧は薄れて、もう直ぐ其處に晴れやかな紫の國が横つて居るのであつた。

余りの嬉しさに一同は思はず拍手した。かくして我一行は七月十三日朝釜山浦に客となつたのである。

十一日午後四時東京を立つてから、十二日午後八時三十分下の關に着くまで二十九時間、汽車の煤煙ですゝけ、一晩中船の蒸し暑さと窮屈とでぐつたり疲れた身体を、閑靜な釜山公立高等女學校に休めた時、私共は漸く生返つて心持になつた。校長先生はじめ櫻蔭會の方々はもとより、學校擧つて私共を誠心こめておもてなし下さつた事は、樂しい旅とは云ひながら兎角旅情たゞよはせ勝な我々に、何んと嬉しかつた事であらう。當夜遲く出立するまで生徒の方々は亦、絶えず可愛いゝ誠を私共に寄せて下さつ

た、「十一月から教生」と、折々嫌な心持をたゞよはせて見る我々にも、始めて「自分の生徒にして見たいな。」と思ふ温い心の芽生えを覺たほど忘れえぬ淑やかな皆樣だつた。

朝鮮の家屋は、全く誰かの言葉通り、遠くから見ると松茸の生えた樣で、山麓から中腹まで密から疎に並んで居る、ランチで釜山港内をめぐつた時、右手に見えた一區域は即ち「一谷」と名づけられた純粹の朝鮮人の村落で、此の種の屋並眞に面白う眺められたのである。藁葺の屋根は年に一度葺代へると否とで貧富が知られる習慣だといふ、山腹に折々眞白い斑點が見える、洗濯物を草の上に干して置くのであつた。朝鮮の女は洗濯を終生の仕事とするやうに聞いた通り、流れのある處に女の群を見出す、彼等はせつ〳〵と洗物に手もと忙しく働いて居るのである。きよらかな日の光と涼しい海の風とを程よく身に受けながら、めぐる港内の心よさ、ランチを捨てゝ、牛疫血清製造所の眺よい靜かな丘にさん〴〵海の氣を吸ひながら、野薔薇馨る島のしゞまにひたつた時、しみ〴〵釜山浦をなつかしいものに思ふので有つた。日本に一箇所しか無い血清所の位置は、何んと世離れたよい處を得たものであらう。望月所長樣より此處の色々なお仕事の委しい説明を承り、冷いサイダーの御馳走に心よさを增す、幽かな波の音にまじつて、ゆるやかな牛の聲が折々流れて來る。岩南半島と赤崎半島とに抱かれて釜山港の口を扼して居る絶影島は、出入の船舶を先づ送迎する唯一の島である、幾多大陸を去らうとする船客に、此の國の名殘を惜しましめ、未だ見ぬ此の地の旅人に、默して半島の榮えを語る。

港の夕暮は、ほんのり鮮人の白衣に暮れ殘つて妙に物思はせる風情である、透き通るやうに白い麻や薄い水色の紗の生地の鮮人の服は、實に夏の夕邊を飾るよい物としみ〴〵思はれた、港町の夜店に客の減つて行く頃の十一時、温い皆樣の御もてなしに名殘りを止めながら、又何日をと期する術もない一行は、心こもれる「さやうなら」を繰り返しながら、廣軌鉄道の客と成つた、特に定められた一人に一つ當の椅子は、二晩をよく眠らなかつた我々にゆつくりくつろぐゆとりを與へたのである、かうして朝鮮の

誠にはぐゝまれながら其第一夜は車中に更けて行くのであつた。

一時四十分名々の胸に思ひ〳〵の夢が熟し切つた頃太邱通過。櫻蔭會を代表なされて佐藤樣久恒樣は此の夜更にわざ〳〵お出迎下され結構な頂き物をする。

人は父母を去つて始めて其恩澤を知ると同樣、昨日からしきりに母國の恩惠を感じて居た我々は、同時に又我校の有難さをもしみ〴〵知る。

十四日午前五時の頃、錦江のほの白い色に晴れやかなあした明け渡つて。いよ〳〵中部に近づいた野山の昨日に變る今朝の眺は、一同を非常によろこばせたのである、窓外に送り迎へる山々は、何れも植林されて可成な丈に生き〳〵と延びて居る、麓に近い無數の土饅頭は、鮮人の墓であつた、柵をめぐらしたり墓標を建てたりして、稍々丁寧に構へられたは身分のよい家のもの、稻は丁度五六寸にも延びて內地に變らない靑田を開展し、白鷺は低く稻葉の上を飛びかふ、山の狹、田の道に點在する藁葺の家には、長閑なあしたの畑が棚引いて、白衣の人は折々無心に列車の疾走を見送つて居る、此の邊り實に長閑な田舍の畫面を表はして居る。

京城からわざ〳〵送られた三日間のプログラム、京城案內記及び地圖など、配布されていよ〳〵向ふ邊りの愉快が鮮やかに浮いて來るので有つた。

京城附近の三十名に餘る櫻蔭會の方々は、公私ともどれだけ御用をお持ちに成つて居た折だつたか分らぬのに、滯在中の三日間はもとより、我々がゆく前後の數日をどんなに御忙しくお盡し下さつた事であらう、又總督府はじめ各學校では餘程の期待をお持ちに成つて、此旅行團を御歡迎下さつた上いかに數々の御便宜を御與へ下された事であらう。關屋學務局長はわざ〳〵御多忙の時を我々の爲特にお割き下さつて、京城公立高等女學校で、朝鮮の敎育に關する大要をお話下された上、上田視學官からも、又一場の御講話を承つたのである。

十四日午前八時五十分南大門に着いた其時、我々の頭に寫つた第一印象は、釜山のそれと何んと違ふ物であつたらう。其處に行きかふ鮮人は、もう汚れた着物のチゲではなくて、眞白い麻衣の心よきを纏

ふた品のよい男女であつた、ツルメキ姿に冠を頂いた男子。正面で分けた黑髮に變つた色のチョクリ、水色のチマの女の姿、何んと夏にふさはしい樣であらう、「朝鮮」と云ふ感じが餘程强められた。

京城で鮮人に接する機會の多くなつた事は、眞に嬉しい、もとより一週間餘りの此の地の旅で、其風習性向の總てが分らう筈はないけれども、少でも多く其處に觸れて見たいとは、願の大部分を占めたものだつたのである。各學校で敎へられるまゝに流暢に日本語あやつる鮮人の子等は、穩かな目元にゑみを湛へて、無遠慮な參觀人の私共に、會釋しては行き過ぎる其樣の愛らしさ、眞に彼の女の友となつて、其口から囁かれる心の叫を聞いて見たい、正しい導手と成つて眞に彼女の行く道を辿つて見たい、日夜彼女達の爲に心を碎かるゝ當局の方々の誠か、眞に徹底するやうにと心念せずには居られなかつた。髮は一樣に正面で割つて、後に編み下げて居る、近頃內地ではやる子供の此髮が、此地から移つたものと領かれた時、眞に面白い事に思はれた、彼の長を我に移し我が長を敎へゆく可き關係の內地と半島に、面白い一つの現象ではないのであらうか、鮮人に接した私共の感は、何んと軟かい親しい物であつたらう。滿洲に入つて支那人に感じたとは、全く趣を別にして居る、其大な身體淺黃色の勞働服、寧ろ恐れを含んで見上げられた、彼れの白衣か表はすやうにこれの淺黃色が暗示するやうに、彼と此との我々の感は、やはり白と淺黃で表象したい樣な心地がする。それ丈支那人は極端な粗食と烈しい勞動によく堪へ得ると聞く、滿鉄の三等室にどれ丈多の苦力が出入するのを見た事だらう、彼等の多くは、遠くに妻子を殘したまゝ、或は娶らうとする準備の爲、此方面に出稼をして居るものださうである、一日八錢で生活して、ずん〴〵金を貯へつゝ、恐ろしくよく働く、撫順で炭坑をまはつた時、大連で滿鉄工場を參觀した時、何んと大多數の彼等が、悠然としかもまつしぐらに、あらゆる危險に無神經で働いて居た事だらう、日々發展してゆく滿洲の大事業に、どれ丈此苦力が無意識に手助をして居るのかと、しみじみ大切な者に思はずには居られなかつた、宿舍に於ける彼等は又何んと呑氣なものだらう、身体は重り

合つても、食物に蠅が集食つても、おかまひなし、此の無神經なればこそ、極端な粗食であらゆる勞動に堪へ忍び得るのであらう、彼等の勞働は鮮人も日人も到底及ぶものではない。日露戰役の終つて間もなく勞働を目的とする二人の若い者が內地から大連に出發した、人手の幾らも入る折に、もつともの企と思つて居た處、間もなく彼等は仕事がないとかで漂然歸國したと聞いた、合點がゆかなかつた自分は此日までそれをすつかり二人の怠惰に歸してしまつて居た、けれども一旦滿洲の地に立つて苦力の此總てを見た時、自分は漸く頷れたのである、ます〳〵知識階級の方々が善良なる使役者となられん事を心念する。鮮人は男より女が働くと聞いた事實は、なほよく知り得なかつたけれども、兎に角長煙管含んで眞晝時呑氣に遊んで居る男の群を多く見た、京城でパゴタ公園に行つた時、其處にどれ丈多くの若人が群れて居たであらう、「今日は日曜日ではないでせう」と發作的に口走るやうな我々に、あたら男子がと惜しまずには居られなかつた、其處の茶亭で、進明高等女學校の御馳走になりながら前總督の「寢て居ても月日はたつぞ蝸牛」と、書き流された文字も言葉も面白い額を仰ぎ見て、戶外のパゴタの塔に目を移した時、其處に面白い一致を見出した。塔は例の淸正が持ち歸らうとした上部の欠けて居るので有名な物なのである。

○京　城

京城と思つて私が眼を閉ぢると、漢陽公園からみおろした夕方の美しい町が夢の樣にぼんやり浮いて來る。

仁川からの歸へりだつたと思ふ。私達は南大門から城壁に沿ふて漢陽公園に登つた。城壁には小さな穴がいくつもいくつもあいて居て、その口が上の方をむいたり、右左に傾いたり、下に傾斜したり、眞直にむいたりして居る。京城高等女學校の成田先生に注意して頂いてはじめて氣がついた私は、こゝからどれだけのたまがとび出た事やらと一々(ひとつ〳〵)のぞいて見た。夕日を脊におひながら綠の道を、かなりけはしい坂路をのぼりつめた。さつと涼しい風が吹いて來て汗はどこへやらいつてしまつた。北漢山が巍然として聳えて居る。岱色の山骨をあらはした武張つ

た山の容。それが輝いた夕の空にあざやかにおされて居る。南山の女性的なのに比べて北漢山は如何しても雄々しい武者を思はせる。王城鎭護といつた樣な風が見える。城壁はこの峰をつゞり谷におりて蜿蜒數哩ずつと京城をとりまいて居る。北漢山。こゝはよく王樣が蒙塵された所で山城があるといふ。漢水は南西の方にゆたかに流れて廣い靑い平野をつくつて居る。天の成せる地さすがに李朝五百有餘年の王城の地とうなづかれる。茸の樣な朝鮮の茅屋はとりはらはれてもういまでは殆ど昔の面影はみられないといふけれど、綠の間から唐繪にある樣な樓門がみえたり、くづれた城壁や靑瓦の寂びた色をみれば、おのづから長い歷史が物語られる。だん〳〵に夕靄が生ひ上つて富德宮の森もにぎやかな鐘路街も靑い並木も夢の樣に薄くなつて來てつひに京城の町全體が柔い夕べの衣でふうはりと包まれた。電車のきしりや汽笛の音やさうしたやかましい響から全く離れて、かうして高いところから夕暮を通してみおろした京城の町は何といふ心地のよいものだつたらう。京城が一番なつかしくみえたのもこの時。美しく見えたのもこの時。バゴダの塔よりも南大門よりもまづさきにかうした京城が浮んで來る。

私が畫いて居るこんな京城の町と朝鮮人のゆるやかな衣との間に私は氣持のよい調和をみつける。

水色やうすい桃色の紗の衣。ゆつたりと襞のとつてある、腰から下がさつとひろがつて如何にも優美な姿。胸のあたりから巾びろの紐をむすびさげたところ。中には靑を下に透かせて純白で裝つて居るのもある。見るからに涼しい夏の夕べに何とふさはしいものだらう。アカシヤ並木のかげなどで私は龍宮からぬけ出て來た樣な美しい人に幾人となくゆきあつた。あでやかな少女の群にゆきあつた。かつぎにかくれてつゝましく歩いてゆく人にもゆきあつた。

玉をつらねた冠のひもを長くむすびたれて繪扇の樣な大きな扇をかざしてゆつたりと歩いて居る。もゝだちや、したうづのあたりなど昔の繪にありさうな兩班階級の人々にも澤山出會つた。さすがに櫻かざした大宮人といつた風の優長な氣分は京城のどこにもたゞよつて居た。

靑瓦をふいた飛燕造りや二層三層の樓門にはこん

な人でなければ繪にもならねば歌にもならぬ。南大門のあたりを逍遙して居た冠姿の人達がどんなに美しく見えたらう。かつぎをきた女達が如何に優しく寫つたらう。自然の調和はほんとに心地がよい。山高帽や脊廣では面白くない。やつぱり長いきせるをもつて冠をきなければほんとに南大門はくゞれないと、私はこんなことを考へた。

釜山に上陸すると早々あのむさくるしいチゲ、木曾の山がつの脊おつて居る樣なと誰かゞいつたがほんとにそんな角の生えたはしごの樣なもので荷物を運んで居るあはれな人達や、泥によごれたヨボ階級の人達をみて私はたゞもうみじめなといふ感にうたれた。うるほひもない、涙もない、荒みきつた生活を、しみ〴〵可愛さうに思つた。土の上にゴロゴロねころがつたり、くすぶつたスリチビでいさかつて居るけだものゝ樣な人をみて私はなくにも泣けない樣な思をいだいた。その私が京城に來てはじめてこんな悠長な人達にあつたのだから嬉しかつたのは無理もない。私は初めてあつたこの人達に何だかなつかしい一種の親しみを感じた。一時はやくめさめた爲めに、一足先きに文明にゆきついただけで決して私達はタイラントの樣な心地であつてはならぬ。姉さん分といつた樣にやさしくそろ〳〵とみちびいてやらねばならぬ。侮る理由もなければ壓しつける權利もない。同胞には變りない。威張るのが勝利者ではない。稍もすれば弱いもの、あはれなものに、威張りたがる。強いようだがこゝが人間の弱いところ。私は朝鮮人をみてしみ〴〵こんなことを思つた。どんな優しい手をひろげても迎へたいひろい心で迎へたい。親しい人々よなつかしい人よ可憐な同胞よと叫ばずには居られなかつた。

○

小さな朝鮮家屋の間を幾曲かした。小さいとは聞いて居ても、これほどまでとは思はなかつた。あの美しい衣の人達がこんな所から出てこようとは、どうしても思はれない。オンドル式になつて居るので周圍は皆壁。窓は小さいのがずつと高い所に有るばかり、其の窓から鮮人はめづらしげに私達を眺めて居た。

書房を見ませうかと御案内下すつた先生が、前の

小さな家の簾を開かれた四疊ばかりとも思はれる室の中に六人の子供が、思ひ思ひの所で勝手な方を向いて、字を書いたり本を讀だりして居る。先生らしい五十餘の老人が一人にこ〳〵と、きせる片手に挨拶をする。私共の來意を告げると、其の子供の一人に本を讀ませた。其の讀み方がすこぶるおもしろい。片膝立てのあぐらで、體を前後にゆら〳〵と振らせながら、妙な節をつけて讀み初めた。馴れぬ私達はお經ともつかぬこの讀み工合を何とめづらしく聞いた事であらう。他の子供ははらばひになつてしきりに習字をして居る。其の字のうまい事にもおどろかされた。

直ぐに京城幼稚園に行く。今しも幼兒は遊戯室へ入る所で、赤、白、紫、薄紅、とり〴〵の美しい衣を着た子供等は、めづらしさうに私達をみて行く。こゝは貴族の幼稚園なので、將來學習院へ入れる目的を以てすつかり日本語で敎育して居るのである。幼兒が圓形を造つて居る其の室へ、私達は導かれた。今日は東京からいらしたお客樣に、上手に唱歌や遊戯をしてお目にかけませうね、と先生は仰有つた。幼兒はおどり上つてよろこんだ。最初に無邪氣な口からは君が代が歌ひ出された。この君が代を私達は何ときいた事であらう。只われしらず涙の頰を傳はるを覺えた。そも何の涙なのであつたらう。水車おたまじやくし、とつぎつぎに可愛く歌はれた。やがてさようならさようならの聲におくられて出て來た私達は一樣にうるんだ眼を見かはして、何て可愛いゝでせうと口々にもらした。

白い上着に黑い裳をつけ、髪を半から分けて後に組み垂れて居る子供を街上によく見た。これは內地で云へば小學校にあたる女子普通學校の生徒である。

私達が女子普通學校へ行つた時は、丁度休の時間で、彼等はゆるやかな歩みを校庭に廻らして居た。朝鮮の子供が運動をしないと云ふ事は、朝鮮に入つて先づ私の感じた事の一つであつた。廣い通、狹い巷に、よく子供は群れて居たが、一度として、鞠投げ、かけつこ等の樣な勇しい遊戯の彼等にされて居るのは、見る事は出來なかつた。子供と云へば直ぐ活動と云ふ事を聯想する私には、これが非常に不思

議に感ぜられた。いたづらにおとなしい子供は私達の決して望む所でない、あくまで子供らしい元氣のある事を要求する。彼等にはそこが不充分である。こゝに目をつけて力を盡したならば、一般朝鮮人にもつと活氣をつける事は案外易く行く事ではあるまいかと思はれた。

應接室には彼等の手になつた手藝品が飾られて居た。遊びざかりの內地の子供には眞似も出來さうにない巧なものであつた。實に彼等は手技に長じて居る。この源因の一つは彼等の運動を好まぬ性質に因るものであらうと思つたのは私の餘りな獨斷であらうか。授業を參觀して、日本語の如何によく話されて居るかに驚かされた。この四月入學したばかりと云ふ子供の自由に思想を發表して居るのをみては、私共の外國語に對する不振をそゝろにはぢたのである。

先生方の熱心な御敎導によつてあらゆる方面に開發されて行く彼等を見て半島の人民の活動はこれからだ。と云ふ力づよい感に充ちて、私達はこゝを立ち去つた。

○仁川

仁川は想像以外で驚いたものゝ一であつた。港と云へば私は直ぐ横濱神戸を想像する。然るに此處には横濱神戸等に見る騷しさ賑かさが無い。實に靜かだ、おちついて居る。アカシアの多い杜峴驛のあたりは殊によかつた。

仁川高女で充分休憩を得た私達は、鮮人部落をぬけて山頂にある測候所へと進んだ。仁川のすべてはこの山にまつはつて伏して居る。穩かな日を受けた海は靜かに前に開いて居る。月尾島小月尾島は綠の面白い姿を其の中に劃して居る。仁川、なんて懷しく響く名であらう。西があつち東がこちらと漸く敎へられて居た當時に、はや私はこの名を聞かされて居た。「二月八日の戰ひに……」などゝ、兄達の歌ふまゝを口眞似した歌の中にも仁川港と云ふ言葉は入つて居た。「海軍軍人の一生懸命に戰つてロシアを破つた遠い所」と聞いて、何だかひどく自分と關係あるものゝ樣に、親しい感を持つて居た。其の仁川に今は居るのである。現にワリヤーク、コレーツ等の沈んだのはそこよと、指し示されて居るのであ

るかつて幼な夢に見て居たあこがれの地にでも伴れられて來たやうな滿足と嬉しさとが湧いて來る。暫らく目を閉ぢて昔想像して居た戰を此處に描き出した。煙突から出る黑煙、發砲の物凄い音、これに伴ふて高くあがる水柱、必死の兵士の働き、なまぐさい血汐の流れる甲板、私はぞつとして目を開いた。海は依然として靜かである。穩かである。そんな事があつたのかと云はぬばかりの顏をして居る、明治十五年十七年の變よりして實に此處は日本に關係の深い土地であつた。幾多の戰士の流血はこゝに注がれ、其の肉むらはこゝにさらされた。しかし其の甲斐はむなしからず、今かうして皇恩の下に開發され朝鮮西岸の第一要津として、其の設備は漸次完成されて居るのである。これを見ては犧牲の士も、今は安けきほゝえみを湛へて眠つて居る事であらう。

仁川灣にランチで乘り出したのは午後一時の頃であつた。眞夏の日はかなり暑いが、水面を涉つて來る風は實に氣持ちがよい。私はしぶきのかゝる舳先に立つて喜んだ、そして全く同じ色に晴れわたつた海と空とを見渡して心ゆくまで、大氣を吸うた。やがて月尾島の近くに船は留つた。はしけによつて島に上がる。急に上陸した私達は、直射の光線と土地のつよい反射との苦しさに、いそいで檢疫所構內の樹蔭にかけ込んだ。中からは一人の役人が出て來られた。私はふと思つた、これがもし眞の檢疫の場合であつたならと、それにつけても今の樂しい旅行がつく〴〵うれしい。案內のまゝに浴室、消毒室、隔離室等を見た。近頃天然痘患者を收容したからと云ふので一つの隔離室は鎖されて居た。この島の頂上には無線電信がある、ずいぶん暑いが有志があれば行かうと御案內下すつた。先生は云はれた。何だかこの暑さをついて登ると云ふのが、むやみにうれしく感じられたので「はゝ、まゐります」と勇み立つと、たちまち五六の仲間が出來た。登山は何度もしたがこの强い日中を侵した事はない、それに大木とては一本もないので、はじめから峰の見えるだけ頂上へ達するには困難を感じる。あえぎ〴〵玉の汗を流しつゝ夢中に上りつめて、木蔭に身を投げた。ふと下をみて驚いた、五六人と思つて居た同勢は優に十人を超して居た、其の中には春田先生さへ交つて居ら

れたのである。「まさか先生までいらつしやるとは思ひませんでした」と誰かゞ云ふ。「でも折角來たんですもの」と先生はあえぎながらも、うれしさうにお笑ひなさる。たつた三本の木で造つて居る蔭に一同は暫らく涼をとつた。小月尾島は丁度庭石の樣に青海原に浮かんで居る。先に私達を乘せて來たランチも、しづかに沖に待つて居る、白帆は依然として呑氣さうだ。小さい局には只一人が事務を取つて居られた。機械についてのくはしい說明の後、實際に受信送信をして見せて下すつた。海外の便りを一つに集めて居るこの小さな裝置に私達は如何に奇異の眼を見張つた事であらう。時間がおくれてはとの注意に促されて此處を去る。先には上りと暑さの大敵の爲、少しも氣づかなかつたが、單調な木の無いこの山路にも、愛の神は充分惠みを垂れて居た。叢には撫子が可愛い夏の色彩を表し、木いちごの珊瑚とも怪まれる紅珠は綠の中に美しく輝いて居た。「よく行つて居らした事」と先に殘つて居た警戒連は迎へて下すつた。「仁川の暑さのすべてを味つて來ました」などゝ云つて笑ふ。

氣もちのよい夕風に送られて、水上警察の近くの埠頭に上陸した私達は、右に折れて築港の方へ向つた。勞動に疲れて例の長ぎせるをくはへた鮮人、賭事に夢中になつて鼎形にかゞんで居る鮮人の幾群かを途中に見た。四十丈に餘る築港の石垣おどろくばかりの閘門の扉を前にした時は、私はその偉大さに驚かされた。そして近く實現せらるべき數隻の大船を横着けにされた雄大な有樣を想像し、盛な港として活氣立つ日の遠からぬ事を信じて、私は心から將來の仁川を祝福した。

無限の感謝をこめた「さようなら」の言葉を後にして仁川を離れた時は、夕日も力ない光を車窓になげて居た。

○平　壤

平壤は、靜かなづかしみのある所として深い印象を與へられた。丁度京城が東京ならば、これは京都とでもいつてよからう。大同江の平野遠く北東から東南にひらけて、茲處に神人檀君の古から高麗朝の舊都として、次は李朝、文祿、日清の役と、上下三千年の歷史を抱いて、汪々城外を回る大同の滂に眠つて

居る。しかし一方には交通の便よく、西鮮に於る物資の集散地として活動して居る、之が平壤である。

次第に眼界の廣くなる北鮮の野を突破した汽車が停車場に入ると、外にはなづかしい櫻蔭會員の方々が、さも〳〵待つて居たといふ樣な顏をして、立つて居て下すつた。「よくこんな遠くへ來た」と喜んで下さる方もあつた。まもなく、三丁ばかりしか離れてゐない、平壤公立高等女學校に招待されて、冷い水道の水で汗を拭ひ、强いサイダーに、蘇生の快さを貪つて、可愛らしい生徒の運ぶアイスクリームをいたゞいた。殊に生徒の手になつた葛饅頭は美事なもので、久々においしく、早速二つを平げてしまつた。

門前に待つて居る自動車に乘つて、寂しい町を通り拔けると田野に出た。赤い土が、薄く埃をあげて空にまつてゐる。松の生えた丘の下で降りる。ぽつぽつと松の幹には銃丸の跡が澤山ある。日清戰爭の名殘りである。箕子の墓では、平壤の戰に日本軍に水を給して、傷いたといふ歷史附のヨボが、當時の有樣を手眞似で得意に話す。勿論言葉は通じないが面白かつた。案內の高等普通學校の小松先生が「コーマツプソ」(有難う)とおつしやると、ヨボは腰をかゞめて「テイタイゴーマスミ」(誠に有難うございます)といつた。私達はこの二種の有難うを憶えて。幾度も々々ヨボと交換しては喜んだ。乙密台に上ると古風な四虛亭がある。平野を流るゝ緩い江のうねりは、中に綾羅、平角の諸洲を抱いて、對岸は遠く、煙霧ともつかぬ彼方に終つてゐる。日清役に大島旅團の苦心したといふ船橋里は、綠樹の中に人家依稀として、左岸にみえる。四虛亭から細い道をだら〳〵と下りて玄武門をくゞる。穹窿の額に「玄武門」と刻られ、廢頹の面影を、石垣にまつはる蔦にとゞめて、ひつそりと立つて居る。二十餘年を經過した今日は、砲彈の音もなく、靜寂の氣は山野に充ち、夏草の茂りに一鳥鳴いて、亡魂の飛翔かとも思はれる。武勇に歌はれた其人もなく、日はさりげなく照つて風は烈しい。牡丹台に上つて、再び廣く大きい眺を恣にした後、山を下りて、美しく彩色され、豪奢な華やかな昔の名殘をとゞめた、龍宮の御門のやうな浮碧樓の前に立つて、小さい人間の心に

何のかゝはりもない豊な流れにながめ入つた。お牧の茶屋はすぐ上にある。午後六時から、この地の敎育に關係ある方々や、櫻蔭會の諸姉は、歡迎會を催して下さつた。人數も少く、くつろいだ温か味のある實に、淡白な日本料理の馳走になる。此の流の鼈の羹は生れて始めて、七十五日の長生きを契つておいしくいたゞいた。

岸邊のポプラーに暮靄罩め、蒼茫と暮れてゆくれの面を、私達をのせた二つの小船は緩く下る。左は模糊として岸邊遠く、右は清流壁の斷崖黑く岨ち、赤壁を想ひ起させる。水の底のやうな靜かさの中にギイ〳〵といふ艫の音が頻りに旅情をそへる。崖の上を、白衣の鮮人の緩歩するのが、闇を透して見える。衣うつ洗濯の音も河岸から聞えてくる。空には星がきらめいて銀河が白く流れて居る。

夕闇のひろ〳〵とする大川の
灯なし小船に人のさゞめく
ゆる〳〵と水は流るゝ大同の
夕河岸に衣うつきこゆ

右岸の崖の上に、練光亭がぽんやりと、薄明の中に浮いてゐる。朝鮮征伐の時、小西と朝鮮軍の諸將とが、和睦條約を定めるため茲で酒宴をした。その折一人の妓生がいきなりこれぞ、と目星をつけた日本の武將を抱いて、この流れに身を投げたといふ。こゝらがさうかもしれない。賢い妓生の哀れな淋しさと、美しさとを思ひながら、暗い水面をみると、川の底から、悲しい聲が呼んでゐるやうな氣がした。時はすぎた、武將もなければ妓生もない。唯黑い水が永遠から永遠に流れてゐる。薄い弦月でも懸つてゐたら、繪である、詩である。雄々しい妓生の靈も、慰まうものをと、他所ながら妓生の冥福をいのつた。稅關の下で船を捨てゝ寂びた町を柳屋旅館の方へ歩いた。翌日は妓生學校を參觀した。

○妓生

妓生！名を聞いた丈で、私にはほろ淋しい想が湧く。靜な晴れた、夕ぐれの大同江を下る時、「あの向ふの方ではよく遊覽船か浮びます。そして妓生の哀つぽい歌がきこえる事があります。」さう敎へられた時、私は美しい淡い哀愁を含んだ妓生の歌聲を想像した。そして、繪の樣に清い美しい妓生を想つ

てなつかしかつた。これが朝鮮で妓生の名をきいた最初である。練光亭の美しい聰しい妓生の屍は、時の經過と共に、いよ〳〵玄妙な詩を唱へ出す事であらう。妓生と深い淋しみのある美しさと、清い細い哀音と、私はそれ許り考へてゐた。さう思ひたかつた。實際今でも平壤と妓生と一所にして、かうした感じを持つて居る。哀調は妓生のシンボルである。黑板塀のほんの出入口と云つた体の所に、「平壤藝妓學校」と筆太に記してあつた。這入つて行くと、三四坪の空地があつて、天氣のよい日の稽古場らしく、高粱の殼で編んだ日覆がしてあつて、地面にはアンペラの敷物が並んでゐた。家は鈎なりの狹苦しいもので、天井の低い、光線の不充分な、陰氣なものだつた。（一体に朝鮮の家屋はかうした感がつきまとつたが）鈎の一方が所謂敎場と見えて、若い妓生が桃色や淺黃の華やかな服裝で、三四十人も居たらしい。一方は化粧部屋で、食堂でもあるらしく、髮をあげて居る妓生と、飯を盛つて居る婆さんとが見えた。外から歸つて來た妓生は、美しい洋傘をたゝんで、暗い部屋の中に笑ひながら消えて行つた。

例の空地や、椽側に近い所にベンチをおいて私達は腰かけた。いつの間にか集つてきた女子供や、冠を冠つた男までが、アンペラの蓆を圍んで立つた居た。先生らしい婆さんが、琴を持つて下りて來た。つゞいて四五人の妓生もアンペラの上に坐つた。髮の白い爺さんも胡坐した。皷や、笙や、鳴物がそろつた。古びた弦の音につれて、和らかな妓生の肉聲がきこえ出した時、私は昨日の想を繰り返した。眼をつぶつてぢつと耳を澄した。何といふなだらかな哀れ深い音調だらう。ポンポンと相をいれる皷の音もなつかしい。ふつと眼をあけると、明るい光線がこの不思議な樂手の一團の上に、一ぱいに漲つて、平坦な空虛な、唯一つ鮮明に畫き出された物象をみるやうであつた。

それから劍舞、可笑しい僧さん踊りがあつた。大きな大鼓の音や、騷しい鐘の音につれてひどく活潑な踊もあつた。私のベンチの向側の椽には、數多の妓生が、重なり、合ふやうにして立つて見下してゐた。玉蜀黍をかじりながら、小さく歌ひながら、調子を取りながら、踊り手のよいバックとなつてゐ

た。舞手の美しい肉聲か、時にすべての鳴物を默さした。そして自然のなだらかな美しい音調は、歌のやんだ後もそこら一ぱいに流れて、一種の淡い淋しみと安らかさとを感じさせた。

○感じのまゝ

朝鮮人の多くは、自覺だの、競爭だのといふ現代の言葉を使はぬ、可愛らしい罪のない圓滿な顏をしてゐる。文明の辛辣な壓迫を加へるには、餘りに氣の毒である。いつまでも武陵桃源の夢を見つゞけて居る繪の中の人としておきたいやうな氣がした。

朝鮮の何處の都市へいつても、日本人の發展が著しく見られる。これは國民としては、勿論喜ぶべき事である。けれども、彼の民からいへば、次第に壓迫されて、今日の競爭に負けたので、誠に氣の毒と言はねばならぬ。弱は强に合せられた。今ではこの區別は全く除いて、融合してしまはねばならぬ。今日は形式的の融和はとれてゐるであらう。又下級の民は、自分も日本人と呼び、呼ばれるのを喜んでゐるとしても、少くとも自國の歷史を知り、自覺した兩班（ヤンバン）名門の者は、さうした所に安心してゐるわけはない。やはり、自國を高く標榜してゆき度いのは、誰も同じ事である。日本人は何となく尊大な風をしてゐる。自惚や自負心は精神的理解の妨となる。かうしてゐる中は、到底精神の融合を見ることはできない。未開な無賴の彼等は、導くよりも、まづ第一に愛しなければならないと思ふ。親和を以て彼等の心服を得てこそ、敎へる事も導く事もできるのであつて、威服せしむるのみであつたならば、いつまでも不徹底に終らなければならぬ。眞と愛とを以て接した時、始めてほんとうの融和ができるのではなからうか。

民族の競爭は、年と共に痛烈を加へて行く。表面以上に近づかれない白人と手を握る事を喜んで、最も關係の深い、同種族の朝鮮人と、眞に團結する事ができなかつたならば、將來憂ふべきものがないとも限らぬ。彼等の形を得るも心を得ず、もしも日本以外に、彼等の心服すべき國が現れた時は、當然彼等は精神の住居（スマヰ）を、其處に求めるやうになるであらう。平等な人類に於て、弱者を導くのは强者の務であり、愛は人生の根本である。傑いといひ、つまら

ないといふ、結局どれ程の相違でもないのに、一人えらがつてゐるのは、寧ろ憐むべきではなからうか。

朝鮮人は確かに、內地人に對して、或る感謝はもつてゐるに違ひない。しかし、いつまでも今日の儘で續くであらうか。鮮人のなか〳〵した、謙讓な態度を見る毎に、氣の毒でたまらなかつた。李朝六百年間虐げられたけれども、憂しと思つた世を、戀しく思つてゐる者があるかもしれない。固く閉された彼等の個性を發展させ、遊惰となつてしまつた彼等に勤勞の樂しさと、尊さとを自覺させるのは、日本人の使命である。これは第一に敎育の力に俟つより外に仕方がない。こゝに至つて、敎育者の責任の大なるを切實に感ずる。爲す事のあまりに多いのを思ふにつけても、つく〴〵と自分の小さいのが歎かれた。

彼等をして、文明生活の幸福と光輝とを、日本のお蔭で見出し得る自覺を喚起せしめねばならぬ。浮薄な射倖心や、輕佻な投機熱に浮かされた青年等が一攫千金の夢を見て渡るやうでは、いつまで經つても發展の見込はない。自信あり、敎養ある人が、眞誠な心を以て、事に當つたならば、着々その効果は收められると思ふ。それも少數では仕方がない。そんな人の多くを日本の朝鮮は渴望してゐる。

この民を導く前に、限りなく愛せよと呼ぶアカシアの道まづいけれども實感である。アカシアの夕ぐれの道を歩み乍ら、しみ〴〵とかう思つた。

○平壤から安東へ

ゆたかな大同江の水を縱に臨んだ他所では一寸みられないめづらしい風光。玄武門や、お牧の茶屋や、さては浮碧樓など次ぎ〳〵に、あの乙密臺や、牡丹臺一帶の綠したゝる樣な景色が、繪の樣に浮んでくる。虛子にかゝれたお牧さんの話が出る。そのお牧さんのところで、ゆふべは盛んな歡迎會をして頂いた。すつぽんはおいしかつた。浮碧樓々々々と心の中で繰りかへす。櫻蔭會の方々が私共の旅館として選定して置いて下さつた柳屋は、きれいで女中が親切でと誰かはいふ。どこまで平壤が氣に入つたことやら。私たちの心はいま殘して來た平壤の追憶でみたされた。平壤はもう他人ではない樣な氣がする。

車窓には青い平原や白い流が展開される。屋根やどろかべにかぼちやの類を這はせたり。田の畔に枝豆などをつくつて置くところなどは、内地の田舍と違ない。骨をあらはした赤土の山や青い丘や、それらのいくつかを送り迎へて、北へ〳〵と汽車はとぶ樣に走る。ふと鴨綠江を渡るといふ新たな喜びがくる。そのさきには滿洲の廣い天地が待つてくれる。京城や平壤や色々の、美しい思ひ出に胸一つぱいにして、先きへ〳〵と新しい喜びを望んで、かうして旅をつゞけて居る私達の心は何と輕いものだらう。美しい線の中を、力にみなぎつた夏の日の中を、何と幸多い旅をつゞけることだらう。

『折角來たのだから、徒歩で鐵橋を渡つて御覽なさい。國境といふものを踏んで御覽なさい』と矢部先生は仰有つて、安東での稅關の厄介はお一人でひきうけて下さつた。御ことばに甘へて私達は、新義州で汽車を降りた。私達の喜びは絕頂に達した。かちでわたるのだ。幾度考へても嬉しいことは嬉しい。今自分は鮮滿の境までやつて來た地圖が腦に浮ぶ。そして國境の赤い線が特に太く目にうつる。なんだかうしろが振りかへつて見たい樣な心地がする。平壤●京城●釜山●下の關●神戸●東京●と。すつと一すぢに行列をして、おじきをして居る樣に思はれる。伸び放題に伸びた夏草の中を二三町も歩いた。七時半といつても夏の日のことで、うすくなつた日沒のなごりの光が、そら中にひろがつて神秘的白雲の間から元寶山がのぞいて居た。丁度富士山の上三合をきりはなした樣な山の容。人はこれを安東富士といつて居る。どこへいつても宗家の富士山は幅がきく。雲は刻々に變つてゆく。見通しの出來ぬほど大きな流。白頭山の雲の間にはぐゝまれた鴨綠江の水は。大樣に美しく流れて居る。滔々とはげしい水の音がする。岸の葦の葉がさら〳〵と青波をうつ。大きな船が往來して居る。世の中の爭などには何のかゝはりもなさ樣に。偉大に悠久に流れて居る。元寶山を包んだ夕暮の白い衣は。川面をたん〳〵にこなたへ迫つて來る。對岸に灯がみえた。一つ一つと。つひに安東の街は赤いほかげでつゞられた。旅の心には歡迎の燈火の樣になつかしい。五町の長い鐵橋が。日本を支那へとつないで居る。太い廣軌線が眞中に

一本通つて居て。その左右には八呎の歩道が出來て居る。これが東洋第一の鐵橋と驚異の眼をはなつ。正服の巡査がもの〳〵しくいつたりきたりして、國境といふ感じはさすがに身を緊縮させる。發動機の力で四人の人が手をかせば、この重い橋は難なく左右に開かれて、自由に大船をやることが出來ると。案内の勞をとられた、新義州の驛長さんは說明された。

河の中流、こゝが日支の境界線と思ふあたりで、私は殊更に足をふみしめて立つた。あゝこの時の感を私は何といつてあらはさう。やゝ沈默。私は棒の樣にたつた。足下には滔々たる水の音。前方には赤く安東の灯がゆらめく。波の方にはなつかしい御國の土が横つて居る。旅に出て知る親の恩。私は御國がたまらなくありがたくなつた。國家といふものはどこまでも强くなければならぬ。國民はどこまでも勝利者でなければならぬと、こんな感じがひし〳〵と湧いて來る。昔なら境を出るといつた樣なたよりない思ひと、眼新らしい先きの天地の期待とが、交々推しよせて右に左に思ひが走る。かうして全長一千メートルをわたりつくした頃には、日はとつぷりと暮れてしまつた。涼しい風が心地よく吹いて來て、闇の中から蛙のこゑがきこえて來た。滿洲の蛙も同じだと思ひ入つた樣に云ふと、違ふと思つて居たのかと笑ひかへされる。一寸憤慨してみたが自分ながら馬鹿〳〵しくなつた。こゝへ來ればもう支那の領土。藍色のはげた服をきた辮髮の支那人が柄の長い脊の低い人力をひいてゆく。まづ一番にこれがめについた。すれ違ふ人はみな恐ろしく脊が高い。

「とう〳〵隣國まで送つて頂いて」と眞面目くさつて誰かゞ云へば、驛長さんは快活に大笑された。輕い氣分にみたされた私たちは、何をみても笑ひたくなる。驛内の賣店で岫巖石とか云つた、青い羊羹の樣なきれいな石の細工物を求める。葉卷煙草入、文鎭猪口など色々のものが、手ぎわよく出來てゐた。七月十八日午後七時半、鮮滿の國境を越ゆ一行元氣益旺盛、とあざやかな紫色の紀念スタンプの押された鴨綠江のゑはがきは、幾枚となく故國の空に送られた。

○撫順

軟らかい濃綠の葉を一ぱいつけたアカシアの並木は、燦々と照る七月の光を浴びながら、白い路の兩側に行儀よく並んでゐる。其の下を荷車を曳いた支那人が通る。日本の紳士も行けば女學生風の人も來る。大きな西洋造りの建物が軒を競ひ、滿洲のこの一劃に宛然日本町が展開してゐる。日本人の活動は滿洲に入つて愈々明かに解る。國家の有難さは茲に來て始めて領かれる。小學校で茶菓の馳走になり、今夜はこゝで滿洲の第一夜が靜かに更ける。

赤い煉瓦造りの倶樂部や、醫院、社宅が、例の青い葉蔭から窺いてゐる。事務所の前は大廣場となつて、圓い池にはざあ〳〵と噴水の音が涼しい。セメントの美ましいテニスコートには、男の子が四五人遊んでゐる。何處となく西洋のパークを思はせる。日はあまり强くなく、アカシアを吹く風は涼しい。夏の撫順は住みいゝと思つた。

夜は社宅の風呂に行つた。電燈の光に長い蔭を落した並木の下を、白い浴衣の男女がぞろ〳〵と歩いてゐる。すべての人がなつかしい。「故國」といふ念はこんな所で一層强くされるのであらう。しかし新しく生れて其儘茲で育つ子供には、どれ位まで國家的觀念があるものか豫想しかねる。教育者もさぞ骨が折れるだらうなどゝ思びながら、案内して下さる小學校の先生の後について行く。素足に靴穿いて風呂へ行くのも、旅らしい思ひ出の一つであらう。二十才前後の若い女、多くても四十才にはまだ間のありさうな女達が、五六人なつかしそうに此方を見る。話でもしてみたい樣な氣がした。こゝにも子供は少く、老人の見つからないのが、新しく發展して行く土地の感じを强くする。

撫順の半面は、なつかしい軟らかい感じに充されてゐるが、これとは全く別の半面を忘れてはならない。そして、眞面目な撫順は其處に現れてゐる。撫順は東西四里、南北一里の廣さに亘る、百三十五尺乃至二百四十尺の石炭層を持つてゐる。千金寨、大山、東鄕、楊柏堡、老虎臺、萬達屋、古城子、龍鳳の八坑があつて、八千三百餘人の日本人と、七萬人の支那人、八十九人の朝鮮人とを入れて、絕えず寶を採掘させてゐる。東鄕坑や大山坑の機械の威力よ

りもモントガスの壯大よりも苦力(クーリー)の生活の憐憫さに深く心を奪はれてしまつた。

煤けた天井の低い長屋のしきり、しかも赤茶けた蓆の一枚に、大の支那人は晝の夢を見續けてゐる。何事か頻りに喋々してゐた二三人は、ふと話をやめて此方を見る。何となく薄氣味惡い。喧ましい機械の下に、塵埃と煙烟と、汗とにまみれる晝も、手足を伸べる夜も、一つ衣で、身の周りの物と云つては何もない。强ひて擧ぐれば、汚れた淺黃の服に湧く虱位のものであらう。彼等の腹を充す可き、包米のパンみた樣なものには、蠅が眞黑くたかつてゐる。氣持の惡いこと夥しい。しかし茲の人生觀は、極めて超然派に屬するもので、神經質の現代人でも、十年位長生きしさうである。「腐つて食べられないものには蠅でもつかぬ。蠅がたかるのは未だ食べられる證據だ。」とこんな理屈も世の中には存在してゐるものを、何故今まで多くの人は氣附かずに、煩悶懊惱したであらう。浮世の流は一つしかない。渡る人の梶のとり樣ばかりでどうでもなるものと、撫順三界まで來て、支那人を見て、大悟徹底した。かうした考をもつてそれに適した體を所有して、何の屈托もない彼等は、要するに幸福の部に屬す可き人間である。客觀的には愚だとも、蛆だとも云へよう。しかし主觀は絕對である。彼等の心を妨ぐ可き何物もない。「自己の滿足。」それより以上の事はあるまい。

棟と棟との間の狹い空地には、新しく糸を通してから何十年を經たかもしれない、垢のにじんだ薄つぺらな、蒲團と云へば云はれる二三枚が乾してある。これでも日光に當てるのだから感心する。支那人はこれの一枚に、柏餅になつてねるとの事、恁うしても生きる甲斐はあるらしい。何處まで行つても自然は人間に生きよと云ふと見える。

七萬人の支那人のお蔭で、撫順の炭坑は年々二百萬噸以上の石炭を產出してゐる。一日の賃金が、二十七八錢から四十三錢位で、せつせと働いて、一枚の褸褸、やつと膝を容るゝ一疊の住居(スマヰ)。玉蜀黍のパンそれに滿足な顏をしてゐる。思へば人間の生活には幾階級あるかしれない。それがアカシアの撫順の半面かと思へば、變な氣がする。一瞥しない人には到

底解らない。犬を犬同志置くから、病氣も流行らないですむものゝ、いつまでもかうした狀態に置く可きものではなからう。

封建時代の黑船に驚いた日本ロシヤの赤鬼に膽を冷やした日本が、今日この通り手を伸べて、澤山の日支の民を使役して、大鑛業をやつてゐるといふのは、日本も伸びたと云はねばならぬ。けれどもまだ文明國とは云はれない。どうかして、この犬の樣な生活から、彼等を脫出させてやりたい。野蠻で、非衞生的な苦力（クーリー）の生活を、文明的に、衞生的に研究して改良すべきであらうと思ふ。敎育ある內地人は、彼等に同情して、無知な民を勞はり、なほ徒らに尊大なる低級な日本人の先導者となつて貰ひたい。炭坑として發展すると共に、精神的にも相當の向上が願はしい。假令ある程度以上は不可能としても、少くとも荒んだ殖民地的の根性を、取り除いて欲しいと思つた。

○奉天

漠々たる平野は限りもなく展開して、滿洲のフリーな風が、青々とした高粱の畑から吹いて來る。心も大きく、ゆつたりとなつて、雨後の空に湛えた氣持のいゝ光の中を步む。お蔭で胡砂吹く風も和馴しい。吹きまくられてもよいから、詩の妙句を味つて見たいと思つた。

日本の忠魂碑と、ロシヤのそれとが半里を隔て相對してゐる。血を流し合つた仇敵の昔は、たゞ一時の夢とすぎて、白骨は永遠に埋められ、悽殺の氣は時の經過と共に消えて、血を吸ふた高粱が徒らにのびてゐる。鐵道の附屬地には日本の家庭が軒を並べ或は空漠たる野に點在してゐる。

奉天病院、南滿醫學堂等、さすがに大きな煉瓦の建物が、堂々と、平野を威嚇して立つてゐる。ポプラーの並木路を、轅のずぬけて長い支那人の人力車に、ひつくりかへりさうになつて日本の紳士や、若い美しい女が乘つて行く。まぬけた調和だなと思へばそれで何處か調和がとれてゐる。乘つてみたい樣な氣もした。

奉天の城內は高さ三丈餘、周圍一里半の磚壁に圍まれた汚い所である。道は車の軸を埋め、裸足でゞも步いたら、膝まで位は裕に沒してしまうと思はれ

る。その上狹い。人力車が通ると思へば驢馬が行く。風呂桶を橫にして、車を附けた樣な滿洲特有の車が、左右にがたつきながら過ぎる。どぶ〳〵の中を、馬車は今にも放り出すかとあやぶむまで動搖する。隣の人と鉢合せしては笑ひながら、皇城へと急ぐ。時々ハネは肩迄見舞つて呉れる。兩側の家の檐や柱は、赤、青、菫に彩色され、延べ金をうたれて金光燦爛たるものである。奧を窺くと瑞兆の爲か「紫氣東來」その他いろんな芽出度い句や、金儲けの文字を墨書した紙がはつてある。支那人のこて〳〵した野鄙な好みや、商賣的根性が遺憾なく現れてゐる。圓く額を剃り上げて、大きなお稚兒髷を頭にのせて、赤や靑の花簪を挿した滿洲婦人が、晴れやかな顏をして物珍らしい一行を見てゐる。すましてクイーンの樣な容態（カッチ）をしてゐる。老人ほど髷も大きく簪も美しい。

稚兒結ひのあかき簪をほこりにて足らへり汝の今日の一日は

さうぞきし少女のごとも支那女髮をいとしみいとしみて行く

普通の町の雜音の外に、茲には支那特有の躁音がある。ベチャクチャ汚い發音が、絕間なく向三軒兩隣の間に交換される。薄汚い淺黃色のだぶ〳〵の服を着た大の男が、わん〳〵騷ぐのだからたまらない。まるで動物園を行く心地がした。その上いやな葱肉と、塵と混つた樣な臭がする。暫くすると、鼻神經といふものはずるいもので、その臭も鼻につかなくなつた。門の前で馬車を降りる。

宮殿は奉天城內の中央にあつて、磚石の壁が高く聳えて繞つてゐる。大淸門は宮殿の正門である。狼獅子の石像が左右に並び、正面に踏龍を畫いた照壁がある。門の東西には飛龍閣、翔鳳閣と云ふ三層樓が相對してゐる。活寧宮は皇帝の宮殿であつて、大宗皇帝の崩御された所である。靑と黃との磚瓦で葺かれ、剛健質朴に出來てゐる。案內して下さる、小學校の河村校長樣のあとに從つて、鳳凰樓に上る。こゝは奉天の最高處で、城內は双眸の中に收まり、城外數十里の廣野のはては、雲とも野とも判然しない。南方遙かに聳えたのは、有名な南塔である。この塔は四方に建てられて、宮城は是等を掛の字に連

ねた、交叉點に當るのである、茲を出て女子師範學校に行く。はや夏休みに入つて、生徒は一人もゐない。授業を見られなかつたのが口惜しかつた。建物も古い、寄宿舍も狹くて汚い。圖畫も一寸うまいのがあるが、習字は本家だけに、さすがに美事なものである。一巡して茶菓を頂戴した後に、待たしてある馬車に乘つて、城壁の側を駈ける。仁丹の看板や赤い何かの廣告をはりつけた洞門の下を通つて、松閣に行き、滿鐵地方事務所主任の原田樣の支那料理の馳走になる。原田樣の奥さんは櫻蔭會の會員で可愛い坊ちやんをお連れになつた。

二階の正面には鏡の裝飾があり、白いテーブルが五つ六つ配置されてある。隅の一つを私達は八人で圍んだ。小皿とスプンとフォークとが置いてある。豚の饅頭や、家鴨の蹼等が大きな鉢に盛られて、次から次へと並ぶ。まはりから自分のフォークで、みんなが一つついて小皿に取る。ビールを薄く甘くした樣な紹興酒は支那的ではなかつた、數限りなく出て來る馳走に一口づゝ食べても滿腹してしまつた。最後に粟の粥が出た。揚貴妃の好きだつたといふ荔枝の湯が出てきた私達が恁うして數多出る支那の料理を大膽に立派にたべてのけたについてはこゝに一人の方を紹介しなければ不思議に思はれる。最初に湯氣のたつ鉢をかきまぜて食べ方の手本を示す役で阿部さんといふ方である。「さあうまいやつてごらんなさい。それ位では支那通とはいはれない」等と云はれて稍逡巡したみんなの手がそろ〳〵動き出す。根が上品にできてゐないのでおいしいとなるとなか〳〵出た手はひつこまず次のが出るまでには殆んど食べてしまう。「やあ皆さん中々支那通ですなあ」と笑はれながら紹興酒も飲めばお鉢も空にする。元氣のいゝみんなはなほ餘りある旅に末頼しく思はれた。阿部さんは宮城にもついて來て下すつた。初は支那人とばかり思つてゐたが御話を伺へば大阪邊りの方らしい。白狀してしまつて大笑ひとなつた。もとは支那人の間に探偵をしてゐらしたとかで眼光が何處となくそれを語つてゐた。「もう内地に歸らうとは思ひません。狹い内地へ、滿洲の廣野に驢馬の鳴き聲を聞いてゐた方がいゝです。」などとお話になつた。

奉天小學校の二階に白々と滿洲の夜が明けた。朝早く北陵見物と出かける。高粱の青い畑中を昨日の如く十臺の馬車は、栗毛の馬に鞭を上げる一騎馬巡査のあとに續く。威風頗る誇るものがある。奉天後に日本軍が掘つた、散兵壕の跡や、工業用の砂を採る爲めに、西洋人が土饅頭の支那墓を堀り崩させた凹凸の路を一時間半ばかり馬車は走つて赤松の茂る門前に止つた。石を甃んだ路が林の中を直線に續く。兩側に石造の象、駱駝、馬各々一對、狻猊二對がある。城壁は四角に繞らされ、その上には道があつて歩いて回ることが出來る。四隅には角樓がある。城壁内の正面には三層樓の高壯な隆恩門がある。その奥に隆恩殿がありて昨日の先生の熱心な説明を承る。無心な頭上に輕い快活な青銅の風鈴が鳴る。

かんころとかそけき音し高樓の風鈴のなる夏のあかつき

ひかり滿つ大空のもと高樓の風鈴の鳴る夏の北陵

もとは四方の軒に鳴つてゐたこの風鈴もずるい支那人は決して盗まないではゆかなかつた。隆恩殿の奥に入ると明樓があつて中央の大石碑には左に漢字で太宗文皇帝の陵と書き中央に滿洲語右に蒙古語で書いてある。その後の一堆の塚は寶頂で夏草の茂みの中に楡の大樹が蟠屈してゐる。これ太宗埋骨の陵である。隆恩門の右の側前に小樓がある。之を焚帛樓と云つて祭祖の時紙帛を焚く禮を行ふと云ふ。前に出ると大石碑樓があつて鼇背に乘つた大理石の石碑があり、「大清昭陵神功聖德碑」と刻してある。碑の左方には藥房、水房、油麵房、水散房、暖房、右方に茶房、衣房等があつて各祭禮に用ひたさうであるが今は僅に其形を留めてゐるにすぎない。苔深い甃の間には夏草茫々と茂りすべてが廢頽の色に充ちてゐる。

日もさゝぬ三層樓のいしぶみに夏草の實のさゆらぎてあり

夏草のすれては低く音たつる廢墟に晝の虫の音ぞずる

北陵は一名昭陵とも松陵とも云ふ。松林の下草には眞紅な撫子が一面まだ露重げに咲いてゐる。七月の日は漸くぎら〳〵と輝き出した。再び馬車にのる。私達が見物する間馭者は草原にねて花でも摘んでゐ

たものと見えて赤い小さい實のなつた木と撫子とを束ねたのを呉れた「はなー北陵」といふのがやつと聞えたばかりで可愛いゝと思つた。そして自分もその三四本を馭者臺の鞭の穴へさしてゐる。花を珍づる人、見かけにもよらぬ、何と優美な心だらう。もと來た路を引返す。ふと高粱の間から現れた滿洲婦人の顏はどこかで一度見たやうな氣がしてなつかしかつた。

奉天は日本人と支那人との雜居である。支那人は悧巧であり頑固である。日本人は肩で風を切つて歩いてゐる。商賣で負けても威張つてゐる。到底商賣や勞働では彼に及ばない。國語を普及し。敎育の力で勝たねばならぬとある方の御話がしみ〳〵と感じられた。頑固一點ばりの支那人は、何もかも日本人の眞似をする朝鮮人とは、まるで異つてゐる。決して日本語を使はないから、商賣に不便で、此方から支那語を憶えるより外に仕方がない、とはある經驗家の御話であつた。今は茲處で日英佛の三國が自國語普及の爲に、支那人を引張りだこにしてゐるとか英人が多く入り込めば英の力に流される多くの日本人が眞誠の心を以て發展の道を講ぜねばならぬ。いつまでも、不遜から威張りの態度では、上に立つ人がいくら肝を焦つても、充分の効果は上らない。

個人としての支那人は、無知であり侮る可き點の多くを、持つてゐるかも知れない。團体としての支那人は、決して馬鹿にすべきものでないと聞いた。奉天の大きな商賣は今尙彼等の手に掌握されてゐる。それに日本の優勝であつた、煙草製造業は、獨國に押されて面白くなくなつたとか、それは支那人の好む、獨特の臭氣ある香料を、彼等が用ゐるからで、日本人には絕對に秘密にしてゐるとの事である。譬ひ奉天に於ける權威は勝ち得るとするも、實際に於ての力を得なければ仕方がない。何處か德川時代の武士と町人との干係に共通の點がある樣に思はれた。將來はこの二つの點に向つて進まなければならぬ。肩摩轂擊の內地に、蝸牛角上の爭をしてゐるよりも、どし〳〵發展の場所を目がけて行くのが日本目下の急務と思はれる。この意味に於て滿洲は敎養あるセコンドブラザーの發展地であらう。

○遼　陽

青々とした柳が二本凉しさうな圓い影をなげて居た遼陽の驛。如何いふものか忘れられない。遼陽は落ちついた心地で私達を迎へてくれた。私達はこゝで旅人といふ何ともいへぬしんみりとした感を味つた。夕暮から夜にかけてのこの遼陽が特更靜かな古風な街といふ感を深くさせたのかもしれぬ。汚れた苦力の顏。石炭の黑山。盛んな工場の煙。そうした强い炭坑の印象をもつた私達には時も時、夕方遼陽についた時非常な落ちつきを感じたのは無理もない。驛を出るとまづ私の目をひいたのは有名な白塔であつた。夕ぐれの空の中に靜かに聳えて居た灰色がゝつた白塔は、實によく遼陽の氣分をあらはして居る。遼陽と白塔。私には如何しても離されない。驛の前から迎へに出て下さつた方々と御一緒に幾臺かのトロをつらねて城內見物口に出かけた。トロといへば私も初めてだ。夏目さんにかゝれたトロを思ひます「勢よく二三十間ついて置いてひよいと腰をかける速力が鈍つた頃を見計らつて素足でとびおりて肩と手とを一所にしてうん〳〵押す」なるほどそうして押してゆく。淡黃色の汚れた服をきた脊の高い辮髮の人が一臺に一人づゝついて居て、前のトロと衝突しさうになつてもなか〳〵ぶつけない。曲つた道を上手に押してゆく。はね出されさうで、どこへつかまらうかともぢ〳〵して居た私もつひにこのたくみなお手ぎわに敬意を拂ふ樣になつた。高い塔の上の方で黑い小さな影が丁度夏の夕の蚊柱の樣に卷いたりひろがつたりしてゐる。あまり小さくてあまり澤山なのでそれが燕だとは一寸考へられなかつた。燕、古塔に燕、何とふさはしいことだらう。この塔は高句麗以後に建てられたもので千餘年の星霜を經て居るものだとか。長い雨風にくづれ落ちた塔の頂、かつて人の驚かさない高い塔の壁は燕らの無上の天地だらう。平和なすみ家だらう。塔はだんだんにおちてゆく。燕の主は親から子へと代を重ねる。——と。何だか寂しい心地がする。

一輪車をみた。兩方の平均がうまくとれてゐる。天狗樣の樣な羽うちはをかざしてゆる〳〵と歩いて居る人をみた。私のあつた婦人はみな耳にかざり輪をはめて居た。きれいに髮をなでつけておちごの樣

な大きなまげをのせて居た。お祭さわぎの樣な髮のかたちときつしりとゆとりのない筒そでの藍色の着物との間に私は何の調和もみつけなかつた。けれどこれはそこらに立つてゐた女をみたときに私が思つたことで私はほんとに盛裝した貴婦人を知らないのだから一概にこの感をおしひろめることは出來ない。何とかいふ門をくゞつてトロは城内に入つた。奉天の樣な規模はない。綠や赤や黃色で塗りかざつた商廛が兩側にならんで居る。何々洋行と大書した看板や龍などを刻りつけた仰山な看板が店先きから道路につき出してある。看板だけ讀んでいつても大變な見學になる。店に陳列されて居る商品をのぞいても學問になる。日本でいふ荒物やといつた樣な店は殊に面白い。道幅も狹いし店も相當に込みあつて居るが割合に靜かな町だ。

市中の灰をこゝへ捨てたので出來たといふ小高い丘に上つた。城壁にとりかこまれた遼陽の町は眼下に展開された。とにかく遼陽は滿洲の城市の中で一番古いもので、遼陽が東京といつたのもこの地だし清朝が奉天に遷るまでの一時の都ともなつたし、古く溯れば箕子衛滿の昔から、色々の歷史をもつた都城である。南の方には首山堡が聳にて居る。首山から東の方にまはつて大きな丘や小さな山が起伏して居る。橘中佐の戰死された饅頭山も見える。三日にわたつた慘たる遼陽戰を思ひ出して無量の感にうたれた。北西の方は一帶に廣い平野が開けて居る。遼陽城の生命は實に首山にかゝるといふものだ。首山の壘を破つたときに我軍はもうすでに遼陽城にのりこんだ樣な思ひがしたらう。かつては唐の太宗皇帝が高麗親征の際に馬を駐めたともいふ。司馬懿が襄平城を攻めたときもまづ首山を占領した。今では南門はこぼたれてないがあとの三門は都城のかためとして昔の面影を忍ばせて居る。私はかうした城壁でとりまいた町を見ると何ともいへぬなつかしみ親しみを感じる。そして滿洲の大きなひろがりの中にこんな都城をいくつも〳〵も畫き出した。壁を築いて禦ぎあつた時代の人の心になりて見たいと思つた。だん〳〵夕暮がはひよつてなべてのものを美しく包んでゆく。私達の宿といふのは遼塔ホテルといつて驛の近くにある。こゝらは滿鐵の附屬地でいかめし

い煉瓦造がならんで街路樹が涼しさうなきれいな路をつくつてゐる。城内からの歸へり路私達は白塔公園に立ち寄つた。こゝは東漢時代に建てられた廣祐寺の遺跡だといふ。礎さへのこらぬ今は昔の伽藍の面影を忍ぶことは出來ない。たゞ二基の佛像が靑い木立の中に寂しさうに立つてゐる。白塔は八稜形の十三層で二百三十餘尺もあるといふ。上層はくづれて燕の住むにまかせてある。周圍には佛像がはつきりと雕まれて居る。滿洲のこんなところにこんな偉大な塔があるのかと私はほんと驚いた。嵐の朝などは塔のまはりに燕が落ちて死んで居る、と、どなたかゞ話して下さつた。私は一晩こゝへ泊つてみたいと思つた位遼陽の氣分が好きだつた。立つまへに宿で飲んだ水、何とつめたい淸い水だつたらう。太子河の水だときいた。一寸したこんなことにさへ遼陽は忘れられない印象をのこした。

○大連と旅順

七月二十六日。とう〳〵最後の日と成つた。愉快と感謝であやなされた鮮滿旅行の果つる日。午前十時出帆の臺南丸でいよ〳〵大陸と別れねばならぬ今日である。大連と旅順で過した終りの四日間は、此の旅行の最終として、又學生時最後の旅行として、あらゆる旅の愉快を集めつくしたほど樂しいなつかしい物である、其の樂しさの焦點と成つた大連は、僅か三日間の宿りであり、親しみであつたけれども何んとはなし自分等との見えざるつながりの固くも纏れる心して、唯歸國が嬉しい、船の歸りが樂しいと云ふ丈の心持には一寸なれない。自分には又個人として最も强い印象を刻んだ土地丈に、同じ名殘惜しさにも亦更に、別の意味の執着さへ手傳つて妙に心をそゝられる、波止場に蠅の山を賣るかとまがふ支那人の群、行きかふ埠頭の人の賑ひ、さては潮の香のする港の朝風、ポプラアカシアの囁まで、唯堪へられぬ思を誘ふ物である。

民政署の藤田樣は、今日も早朝から色々の御心盡し。過る二十二日、シボ〳〵雨の午前八時、ステーションに着いた其時から萬事のお世話、中一日置いて三日間の滯在中、市内の御案内から馬車の事まであまさず御計らひ下されし其上、前日は面倒な支那人店の買物までに御忙しい時をお使ひ下されたお方

で有る。大陸の關門釜山港で、公立高等女學校の校長始め櫻蔭會の皆樣方の色々な御心やりに、吃驚して以來兎に角今日まで三週間、鮮滿の方々の御親切を綱渡りして來たやうな物である、最後の今と成つてずつと振り返つた其時唯「感謝」あるのみ。試驗の忙しさと急の決定と、自分の怠りとで不用意に出掛た事がしみ〴〵氣恥しい、東京を出る其時こそ「何ボンヤリ行つてボンヤリ歸りませう」などうつかり語り合つた輕々しい心が、此旅行中至れり盡せりの御心盡で、堪へず濟まぬと囁いて居たので有る。出帆日の今朝とて、埠頭通ひの電車は混雜する、多くの方々御見送り下さる。なほ數十日を滿洲の地にお過しの矢部先生、途中から此行にお加りに成つた重田先生、朝鮮にお內の有る平山樣のお三人は、もう今日から成行の方ではないと云ふ淋しみ、新しく湧き添ふ。

二等船室に席を定めた一行十八名は、解纜前の數分をあはたらしう過して、今や、鷹揚に岸邊はなるゝ臺南丸甲板上に、思ひ〳〵の胸を抱いて、遠ざかる陸を眺めて佇む。なつかしむ港の家並、人々の影、數多の船舶やがて霧にかくれし、我船は風もなく波も立たぬ穩やかな航路を南に〳〵とひた走りゆく。

憶思出多いなつかしい鮮滿の地は、はや波のあなたに、アカシアに朝風馨る滿洲の原、鮮人の白衣に暮るゝ朝野の夕、さては支那人家屋、社宅の洋館など、頭に住來する此の總てが、唯鮮滿旅行の印象と丈けに此まゝ消え去るのであらうか。なつかしい過去の思出と丈に、淡くも殘る影となり行くのであらうか。なほ多くの發展を未來に期した活動の新天地は、我々が好奇の心をそゝりてやまぬものである。頭に畫いた新領土實際に見た滿洲の地、今更相違に獨り驚く、內地の炭山から僕に想像した撫順炭坑、耳なれた名の奉天、大連、旅順港、如何に我心、我目に新しい活動の現實を展開した事であらう、昔の戰場今の新領土と丈しか知らなかつた我々に、其豊富な、其清新な、活躍の實社會を見せられた事は、何の幸であつたらう。ともすれば井底の蛙式に、狹い眼界に身も心も浸り勝な我々が、なほ若い心の躍つて居る日に於て、かゝる新天地を實觀した事は、生涯を通じてどんなに將來の氣力を支配するよすが

と成るであらう。「是からの人間は例へ女でも內地でなければ等縮つて居ては」、と漠然抱いて居た自分の思想は、もう抽象的のものでは無い、此旅行に依つて立派に裏書づきのものと成つた。

ステーションを起點に、今新道路工事に着手中の奉天附屬地、大廣場を中心にして、放射形の幾條の道路を振り出した大連新市街、內地の何處に之を見出す事が出來やう、これこそ世界の大道に通ずるの道と嬉しう眺められた。現にアスファルトで道路を先づ固め、次で其兩側に家屋を建てんと工事中の奉天附屬地の方針は、是を西洋の市街開設法に學んだものだといふ。

大連全市とは、露西亞人の殘した市街其ものとのみ想像したのは誤りで、其形見は僅に露西亞市街と稱へる一角に見出す計りで、其東方にこそ、我國人が鋭意經營した新市街がある、これぞ大連の大部分を占めて居るものだつたのである。此新舊二市を繫ぐ日本橋は、我東都の日本橋に似て稍廣く、又長い日本技師の設計に依ると聞く、新市街の中心をなすものは大和ホテルである。二十五日即ち大連に着いて四日目の午後、市街の大體を見終つた最後として此のホテルの屋上庭園で滿鐵から茶菓の饗應に與つた。ホテルは唯に市の中心を成す許でなく、小高い丘に建てられた五階の洋館であるから、其屋上は實に大連全市を一眸に收める事が出來る位置なのである。今や我が前に大連市街の鳥瞰圖は開展せられた、東西南北つぶさに說明せらるゝ儘に、かねて滿鐵から贈られた大連全圖便りに、今まで見た個所の位置を確かめ、又記憶を再び呼び返して更に前日の印象を强むるの仕合な時を持つ事が出來たのである。

先づ橫濱正金銀行大連支店を正面にして立つた時稍々視線を右方に傾よせると其處に、東洋第一と云はるゝ大きな大連發電所の煙突を見る、ダルニー市に名殘を告げる今はに、露西亞人の破壞し殘したものだといふ、左方に近く民政の屋根を見下し、更に其現像を延長した邊りには、所謂露西亞市街を指點する事が出來る。今瞑目して日に淡く成りゆく此の邊りを思ひ浮べると、廣やかな又靜かな洋館の立ち並ぶ此一角を彷彿と思ひ浮べる事が出來るのであ

る。二十二日此市に着いて先づ案内されたは即ち此區域であつた、北大山通りと名づけられる單線の電車道を南に下つて、大連第二小學校の玄關でお待ち受けのレンズに納り、晝食として其講堂で大和ホテルのサンドイッチを饗食せられたのである。去る四十二年の建築で、正面に一寸内地で見る事の出來ぬステージを持つた講堂である、ふと其處に兒童の爲掲げられた二重橋と富士山の二面の額を見て、一寸淡いうら悲しさを覺える。内地から來て變つた風物と其發展に唯感心して居る我々に、今まで想像も出來ずに見逃して居た或物、内地人の氣づかずに過して居る或物が、一般新開地には現實の問題として提供されて居るのでは無かつたらうか。兎も角此處に育つた兒童の頭には、内地で當然養はれる何物かの欠けんとするを補うとして居らるゝかのやうに感じられたのである、堂々とした立派な校舍、到底小學校だとは思はれぬ位である、一體に此の地は富有であるから其經營せられて居る各學校の完備した立派なのに實に驚く。奉天で一夜の宿をお願ひした附屬地の尋常小學校などでも何んと整つたものであつたらう、此點は内地の子供より眞に幸福である。學校に北隣する北公園の幼兒運動場は、かねて我校の附屬幼稚園に多年御經驗になつた坂井樣が、御活動なのである。道すがらそれを承りながら、もとよりお見かけした方とは思ひ設けず、お玄關でにこやかに迎へられて始めて吃驚、我々が入學して都の子供の余り繪に似る愛らしさに、あつけに取られてよく藤棚の下で茫然と見とれて居た頃から、常にまつはる幼兒を高いお脊屈めながらお世話なすつて居らしたのをよくお見受した、其方だつたのである、此處で今お會ひして、已に我が校をお去りに成つた事を始めて知る、餘りのお手早さに寧ろ妬ましさ覺ゆる位だつた、日曜の事とて園兒に親しむ折は持たなかつたけれども、其愛らしい椅子に倚つて製作品ども拜見しながら、其いぢらしさ思ひ浮べつゝ 色々御もてなしに與る、公園に茂る林間の此の樂園に祝福祈りつゝ、涼しい木蔭繪ひながら公園のテニスコートを右手に見て、稍々廣い道に出でゆくしばらくにして其處に滿鐵の地質研究所がある。碧海先生御活動の場所、先生は此の朝瓦房店までお迎へ下されシベ

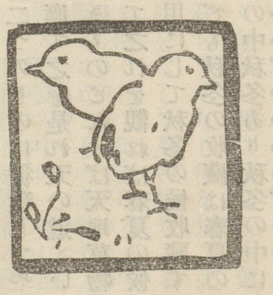
リアの旅をおすませに成つた許りのお天氣さで、車中いろ〳〵なお物語、ます〳〵頑丈な御姿芽出度見上げられた、數々の珍らしい鑛物、化石或は此の地特産物など數多陳列せらる、夏目樣の「滿韓ところ〳〵」時代の大和ホテルとは、即ち此建物であつたと後で聞く、其前面の廣大な洋館は、これも「滿韓ところ〳〵」で讀みなれた總裁の社宅ときゝ、しげ〳〵仰ぎ見るのであつた、これらはホテル屋上庭園の正面を見渡した邊りの追憶。次で後方にめぐつて三方を見まはす。

右方より大連公立高等女學校邊りまでの一體には旅順港から歸つた廿四日及び此の日本ホテルに來るまでに見まはつた箇所を指點する事が出來る。右に櫛比する屋根を眺めて視線のつきる邊りに、大連富士は風情よく此の邊りの背景をなして聳えて居る、沙河口は其稍々左方に當るのであらう。有名な滿鐵工場の所在地である。唯に工場許りでなく社宅學校寺社會堂郵便局などあらゆる工場關係の建物があつて一の社會をなして居ると云つてもよいのだらうと思はれる處なのである、森博士其他お二人の御親切な御案内で工場くまなく拜見する、其處に働く大多數は苦力である、勿論それを使役せらるゝ方々は、それ〴〵專門學校をすまされた内地の方であるは云ふまでもない、こんな大仕掛の工場を始めて見た我々は、今更滿鐵の大きな事業に唯打たれた許りである。星ヶ浦とはかの幼稚園で幼兒の集めた、眞白い奇麗な、何れも丸味の有る石を、一々撫でゝ見た其時から、砂の白い、いくらも玉の石の散つて居る處と想像した場所である。ホテルの庭園面白く、貸別莊のたゞずまひをかしい別天地で、波のうねり殊に珍らしう見やられた、森博士より茶菓の御馳走に成る、大連中央試驗場では、慶松博士のくはしい御說明をうかゞつた上、工場を拜見する、柞蠶製絲及其織場を最も興味多く感じた。支那人の賣る絹紬は、内地に最も恰好な土產ながら、一樣に變化なき色と縞とにあき〳〵して、もつと改良のしやうもと思つて居た矢先とて、此處で柞蠶を精製して特有の色を白に代へこれを織つて羽二重とまがふ迄に製作されたのを見て、實に〳〵嬉しう變化ある處に進步ありといつたやうな感じがした。大連高女は南山を背景

にして、西に埠頭を見下す高臺に建てられた新校舍である。其廣大な眞に完備した學校の最も眺めよい一室で、ホテルに來る前、茗溪會、櫻蔭會員の御手厚き御畫を戴く、窓下に近く滿洲第一の產物たる大豆倉庫、豆粕製造所、油坊などの軒を並ぶるを見る大豆は滿洲の富源とも云ふべきもの、滿洲鐵道の客は四等にみつる苦力でもなければ、八割引の旅行團でもなく、實に大豆其物ださうである、營口爲に衰へ大連爲に繁昌す、其前面は即ち東洋第一の大連港である、第一第二の埠頭に添へて、今や第三埠頭は更に計畫中だといふ、二十二日此の港內を港務所のランチで一週し、一々地圖に照らして說明を忝うしたのである、此の邊り數年前まではまだ草深い畫なほ淋しい海邊だつたときく、進步の迅速これをもつても想像する事が出來る。

日に日々に發展してゆく生氣の漲つた滿洲の地、なほ將來にどれ丈の發展を殘して居るのであらうぞ兎に角習慣の惰力に辷つてゆく內地では、到底見る事の出來ぬ活躍と進步が未來を飾る事であらう、實に御國唯一の新天地の末長き發展を遙かに祈らずには居られぬ。

今自分は滿洲の進運を夢み、現時の發展を思ひ浮べて感に入つて云ひ知れぬ愉快を覺えて居るけれども、同時に此の溢るゝ感謝を遂には旅順にまで運ばずには居られぬのである。嗚呼滿洲の地幾多男子の膏血をもつて購はれたものであらう、實に日淸の役と云ひ日露の戰と云ふ大犧牲は、爲に拂はれたのであつた、大連着の翌二十三日、白玉山の表忠塔上から旅順港灣を俯瞰して親しく其戰況に涙を呑み、下りて記念品陳列所に細川少佐の實戰談に耳驚かし、目親しく陳列所の彈痕を目擊し、やがて馬車を驅つて新舊市街を遠く近く取りまく要塞に立つた時、等しう遊子の心に通ふたは何物であつたらう、折からの戰の昔吊ふに似て、累々たる山系は霧に見えがくれし、人なき戰蹟風獨り寂寞を破る、案內者の說明徒に風籟に消え、遊子唯默して往時の追懷に更ける許りであつた、南眼下に港灣をおさめ、北に茫々たる滿洲の大野を見通す金城の旅順要塞、實に防ぐに易く攻むるに難い諸堡壘、萬感交々湧いて言葉はない、よくも占領の出來たものだと唯驚かるゝ許りで有つた

東雞冠山北砲臺盤龍山などの永久堡壘、昔ながらの慘たる其狀、既に戰あつて十數年を隔てるとは到底思へない、なま〳〵しい血汐岩を染め、生臭き風かほるかとばかり戰況の痛ましさひし〳〵身にしみて覺ゆるのであつた。最も苦戰を重ねた望臺上の砲二門、今なほ昔を語りて雲表に聳ゆ、やがて此端の高峰爾靈山下に馬車を驅る事約一時間。夕暮の雲いよ〳〵可笑しく山上の風益々烈し、これぞ世に歌はれたる二百三高地から踏みならす峰上に今なほ彈片間々散在す、折柄中腹に土堀り返す苦力の一群、我士官の指揮で今なほ埋沒した死體を發掘して居るのであつた、我々の爲時に俵から士官の取り出された頭蓋骨近日見出されたものとか、頭上に彈丸貫徹の跡を持つ、嗚呼そも何處の誰の子ぞかくなつて今日我々に戰のみじめを語らんとは、やがてうや〳〵しく納骨祠に埋葬せらるゝ由、溢るゝ心を敬禮に表はして一同言葉なく山を下る。新舊の二市はや夕闇に默して戰の昔を語らず、ポプラの風涼しき海邊を宿に辿る折角、表忠塔雲間に燦然として先を放つ、車上の我等今日見し邊りを繰り返し心に浮べながらはるかに白玉山上納骨祠に聲なき感謝を捧げるのであつた。

（H、K、S、Y）